

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13243

研究課題名（和文）在外教育施設を離れて日本語を学ぶ子どもたちの日本語習得の実態に関する研究

研究課題名（英文）Japanese language acquisition by children learning Japanese outside of overseas Japanese educational facilities

研究代表者

本間 祥子（HOMMA, SHOKO）

千葉大学・大学院国際学術研究院・助教

研究者番号：00823717

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、在外教育施設に「通うことができなかった」「通うことを選択しなかった」「通うことをやめてしまった」子どもたちの日本語習得の実態を明らかにしたうえで、子どもたちへの日本語教育実践のあり方を提案しようとするものである。そのために、子どもの成長を一番近くで見守ってきた保護者と子ども本人へのインタビューや、教育関係者との意見交流会を実施した。また、具体的な日本語教育実践のデザインに向けて、実際に日本語教室での授業実践をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、従来の「在外教育施設」という枠組みからは捉えきれなかった、日本語を学ぶ子どもたちの存在に焦点を当て、その日本語習得の実態に迫った点である。そのような子どもたち（現在は、大学生）や保護者、教育関係者らと意見交流をするなかで、今後どのような日本語教育が必要なのかを一緒に考えることができた。そのうえで母語話者至上主義的な日本語教育のあり方に問題提起し、今後、子どもたちへの日本語教育は、何をめざし、どのようにおこなわれるべきなのかを提案した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to understand the situation of Japanese language acquisition by children learning Japanese outside of overseas Japanese educational facilities. Through the practice of Japanese language classes and interviews with parents, children, and teachers, the direction of Japanese language education practice for children was envisioned.

研究分野：年少者日本語教育

キーワード：年少者日本語教育 海外子女教育 在外教育施設 日本人学校 補習授業校 継承語教育 シンガポール

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は、海外の日本人学校や補習授業校といった在外教育施設に「通うことができなかった」「通わない選択をした」「通うことをやめてしまった」子どもの存在に焦点を当て、子どもたちの日本語習得の実態に迫ろうとするものである。このような子どもたちが現れた背景には、近年の在外教育施設において、多様な日本語レベルをもつ子どもが急増した結果、「日本語能力の高い子ども」だけを受け入れる方針を採用する学校が見られるようになったという事情がある。その結果、在外教育施設で学びたくても学ぶことができない子どもや、受験を諦めてしまう子ども、あるいは、たとえ受験に合格したとしても学習についていけずに退学してしまう子どもが現れるようになった。

このように、在外教育施設の枠からはみ出してしまった子どもたちは、その後どのように日本語と向き合い成長していくのだろうか。また、それを見守る親は、わが子の日本語学習をどのように考えているのだろうか。海外で暮らす日本にルーツをもつ子どもたちにとって、家庭外で日本語を学ぶことのできる在外教育施設の果たす役割は、依然として大きいと考えられる。しかしながら、従来の研究では、在外教育施設に通いながら日本語を学ぶ子どもたちについて検討したものがほとんどであり、その枠からこぼれ落ちてしまった子どもたちの日本語習得の実態については、これまでのところ十分に明らかにされてきたとは言い難い。子どもたちにとって言語を学ぶことは、他者との関わりやアイデンティティ交渉、そして、生き方そのものを左右する大きな問題である。ゆえに、喫緊の課題となるのは、このような子どもたちの日本語習得の実態を解明し、子どもたちへの日本語教育のあるべき姿を提案していくことである。

2. 研究の目的

本研究では、在外教育施設に「通うことができなかった」「通うことを選択しなかった」「通うことをやめてしまった」子どもたちの存在に焦点を当て、子どもたちの日本語習得の実態に着目する。そのために、子どもの成長を一番近くで見守ってきた親と、子ども本人へのインタビューをとおして、以下の三点を明らかにすることを目的とした。

子どもたちは、これまでどのように日本語を学んできたか。

日本語との関わりは、子どもたちの成長においてどのような意味をもっていたか。

子どもたちの親は、わが子の日本語学習をどのように見守ってきたか。

以上の点を明らかにすることにより、今後、子どもたちへの日本語教育は、何をめざし、どのように行われるべきなのかを具体的に提案する。

3. 研究の方法

(1) 先行研究の批判的検討と在外教育施設に関する歴史的背景の把握

海外で日本語を学ぶ子どもたちを取り巻く環境を理解するため、先行研究を歴史的に検討し、どのような理念のもとに教育が展開されてきたのかを整理した。また、本研究のフィールドであるシンガポールの在外教育施設を訪問し、教育関係者へのインタビューを実施した。

(2) 子どもたちと保護者へのインタビュー調査

1年目は、シンガポールにおいて、調査協力者の子どもたちとその保護者へのインタビュー調査を実施した。研究課題を明らかにすることを目的に、これまでどのように日本語学習と向き合い、どのような思いを抱いてきたのかを語ってもらった。2年目は、前年インタビューに協力してもらった子どもたちへの追跡調査をおこなった。大学進学を果たした子どもたちへのインタビュー調査では、幼少期にどのような日本語教育が必要だったのかを、当時の教員であった筆者と子どもたちが一緒に考えることを試みた。

(3) 今後の教育実践構築へ向けた検討

複数の在外教育施設に勤務した経験をもつ教員へのインタビュー調査をおこなった。複数言語環境で成長する子どもたちにどのように向き合ってきたのかを整理したうえで、今後の教員養成や教員研修にどのような視点が必要なのかを検討した。また、筆者自身の教育実践を改めて振り返り、その成果と課題をまとめることにも取り組んだ。

(4) 日本語教育実践のデザインと実施

実際にどのような日本語教育の実践が可能か検討するために地域の日本語教室にて授業実践をおこなった。子どもたちにとっての日本語学習の意味に着目した実践をデザインしながら、現在も実践を継続中である。

(5) 研究成果の公表

一連の研究成果は、学会等での発表や研究論文としてまとめた。また、シンガポールで暮らす日本にルーツをもつ子どもたちに関わる教師や保護者を対象としたセミナーにて公表した。教職課程で学ぶ大学生を対象としたセミナーでは、教師養成の視点から研究成果を公表した。

4. 研究成果

(1) 子どもたちの日本語学習経験から

海外長期滞在家庭の日本人の子どもが、補習授業校での学習経験をどのように意味づけているのかを探るために、子どもたちのライフストーリーを通じて、当時どのような思いで補習授業校に通い、日本語を学んでいたのかを明らかにした。その結果、補習授業校での教育は、子どもたちが必要とするものと必ずしも一致するものではなく、両者の狭間で複雑な思いを抱えながら日本語を学んでいたことが分かった。その姿から、補習授業校では、個々の子どもにとっての日本語とのつき合い方を認め、それを後押ししていくような教育実践が必要であることが示唆された。その際、補習授業校に通い続けることだけを日本語学習の成功と考えるのではなく、日本語学習から一度離れようとする子どもの考え方も子ども自身の選択として肯定的に捉え、自分に合った方法で日本語と関わることのできる環境を整えていくことが重要である。

(2) 保護者や教育関係者との意見交流から

複数言語環境で子育てをする保護者との意見交流では、子どもの言語教育に関するさまざまな不安や葛藤、困難を感じていることが明らかになった。空間や言語間など、日々多様で複雑な移動を経験しながら生活する家族にとって、心の拠り所となるような在外教育施設が十分ではないという声も聞かれた。子どもを取り巻く大人たちが、母語話者至上主義的な日本語能力観から脱却し、子どもたちの生活世界に根ざしたことばの教育のあり方を模索していくことが重要である。

(3) 教員養成・教員研修の視点から

近年の在外教育施設は、多様な言語文化背景をもつ子どもたちがともに学ぶ場となっている。このような状況をふまえると、子どもたちの日本語能力不足を補う教育を展開するだけでは、日本語を含む複数の言語を学ぶ子どもたちの成長・発達に必要な力を育成することは難しいといえる。子どもたちへのことばの教育を構想していくうえでは、子どもたちの日本語能力を育成していくことと同時に、子どもたちが自らの認識や感情を言語化し、自分自身を語ることばの力を育んでいくことが重要であると考察された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 川上郁雄・三宅和子・本間祥子	4. 巻 24
2. 論文標題 グローバルな日本語教育実践を構想する 「移動とことば」の視点から考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『ヨーロッパ日本語教育』	6. 最初と最後の頁 58-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 本間祥子	4. 巻 30
2. 論文標題 学校現場における子どもの日本語教育の専門性をどう高めていくかー国内外での教育経験から（【特集】子どもと日本語教育ー専門家の養成・研修のあり方を実践から考える）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 41-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 本間祥子・重松香奈	4. 巻 17
2. 論文標題 海外長期滞在家庭の子どもは補習授業校での学習経験をどのように意味づけているかー補習授業校を卒業した大学生へのインタビューから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究	6. 最初と最後の頁 92-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 重松香奈・本間祥子
2. 発表標題 海外長期滞在家庭の子ども日本語学習経験から探る補習授業校の役割 シンガポールで成長した大学生へのインタビューから
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会2020年度研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川上郁雄・池上摩希子・宮崎里司・福島青史・本間祥子
2. 発表標題 子どもと日本語教育 専門家の養成・研修のあり方を実践から考える
3. 学会等名 早稲田大学日本語教育学会2021年春季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川上郁雄・三宅和子・本間祥子
2. 発表標題 グローバルな日本語教育実践を構想する 「移動とことば」の視点から考える
3. 学会等名 第23回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本間祥子
2. 発表標題 子どもたちの生活世界から考えることばの教育
3. 学会等名 シンガポール日本語教師の会 日本語教育特別セミナー（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------